

幼い日↑↓老年

神かん 沢ざわ 利子

わたしは娘が幼い時、貧しく病気であったので娘とあそぶことも、また、素敵な本も玩具も衣服も、何ひとつ買ってやることは出来なかった。自分が世の中のいろんなことに傷ついておびえてさえたので、幼い娘を親鳥が雛を守るようにかばうことすら出来なかった。そんな情ない母親は話をすることも下手で、むかしの親たちのように昔話だつてろくに覚えていず、アンデルセンもうる覚えだった。それでも唯ひとつ、自分が育った幼い日の思い出を語る時、はじめて娘たちはいきいと瞳をかがやかせた。あら、こんなことがそんなに面白いのだからかとわたしはびっくりし、自分もしぜんに楽しくなって、今は異国となったからふと——サハリンの幼年時代を語ったものである。思えばそれひとつくらいが娘たちを喜ばせたことだったろう。そしてそのことが自分の幼年時代を賸めさせることになり、豊かなものを貰っていたことへの驚きと感謝と、ひきくらべて娘の幼年時代を作る（環境）自分の申し訳なきを思った。そうして、娘へ語ることで呼びさまされた自分の幼年時代への思いが、最初の作品「ちびっこカムのぼうけん」という童話の世界へわたしを誘ってくれたものようである。

前置きが長くなったが、わたしの育ったのは、サハリン島のまん中へん、東海岸よりの戸数六、七十戸の部落であつ



た。西側に山脈が連なり東北にかけて原野がひろがっていた。とど松やえぞ松の針葉樹林と、楊柳、白樺やナナカマドの林が茂っていた。夏には柳蘭の花が咲き、秋には雪に先だってその白い綿毛が風にとび交うのであった。縞リスが太い尻尾をゆらゆらさせてあそんでいたし、林の中には雷鳥もいた。

わたしの家には馬がいて、町の草競馬に出るほかは父が乗ったり、冬には橇を引かせたりした。鈴を鳴らして馬橇が駆けてくるのを待っていたクリスマス之夜——それは町の中学から帰省する兄たちをのせた橇なのだった。「あの橇の鈴は？」「あれは音色が違うよ」「あ、いっちゃった……」近づき又遠去かる鈴の音に耳を澄ましていた幼い日のことは、今でも鮮やかに思いだされる。

子どもの橇はみな手作りで大きいあんちゃんや父ちゃんが作ってくれた。学校へいくのは勉強にいくより橇のりにいくようなものだった。運動場の横が丘だったから休み時間はみなが争ってスキーや橇で滑り、放課後も暗くなるまで滑ってあそぶのだった。スキーは今とちがって木製であったから、少年たちは自分で木を削り、先を湯でぬくめて曲げた白木のスキーをはいていた。わたしはスキーを作るなんて珍しくて、つくづくと見守ったものだ。わたしはよその村からこして来て、わたしのスキーは町で買ったものだったから——、スキーを作る少年たちがとてもえらい人に見えた。スキーや橇のない子は雪合戦ばかりしていたと思うだろうが、いや、どうして彼らはちゃんと別のあそびを発明して滑る仲間に加っていた。一番なつかしいのは湯タンポの橇だ。あのブリキの条すだの入った湯タンポは北国には欠かせないものだ。その潰れひしゃげたところにお尻をのっけて、両手で湯タンポの端をおさえて、つまり小判型のを横向けにしてしゅーっと坂を滑り下りるのだ。ブリキの上に条が入っているのだからそのスピードのこと！ 少し反り身になってぐっとのばした足と体で舵をとって滑る。これはちょっと爽快な乗り物だった。

今だってわたしは湯タンポの橇ののってみたい。だれもないお月夜に山を滑ったら風のようにとぶだろうと思う。

でも、こどもと違ってぶざまなお尻は湯タンポにのっかるかしら、心配だ。そう思うと瘦せたお婆さんがいともかるく湯タンポの櫛にうちのって、月夜の山を妖精のごとく魔女のごとくとんでいくお話がかきたくなったりする――。

とにかくこどもたちは自在なきいもので、湯タンポがなくなつて長ぐつがあった。底のぎざぎざが磨りへつてつるになつた長ぐつは、滑るのにもつてこいだつた。みんなは丘の上にならんで一列につながつてしゃがみ、丘からしゅーと滑りおる。何輛連結もののこの汽車はひとりか転ぶと次々に転んで、雪げむりとともに下まで滑りおちるのだつた。太つて大きな体の校長先生も仲間に入って滑つたが、先生が転ぶと凄じ地響きがしてみなは笑い転げてしまうのだつた。

思えば雪はこどもたちに平等にたのしみを与えてくれたようだ。雪を転がし雪にまみれ、雪で作つたおうちの中で、ひっそりと空想のお客とあそぶのもたのしかつた。こどもたちは限らない雪に限らないあそびを見つけていった。それは都会の店にならんだ精巧な百の玩具よりもゆたかで美しく力づよかつた。

小さい時、赤マントにおちてくる雪の片が、きっかりと美しい六角の花型をしているのにおどろいて、息をかけないようにして瞞めていたのを覚えている。あれは自然のふしぎを覗いたはじめての経験ともいえるだろう。自分が生まれたい記憶もないのに、ちゃんと小さな人の形をして生きていることのふしぎさは、空からどうしてこんなに雪が落ちてくるのか、あんなに沢山の星が輝いているのか、川がどうしていつも流れているのかというように、すべてのふしぎに繋がつて大変雑くて素朴な問が湧いてくるのだつた。

朝目がさめると、ふとんの上が霜がおりたようになっていたり、髪が白く凍つてることがあつたし、ガラス窓にはあの妖精が描いたような水の羽根模様が刻まれていた。

そんなふしぎが日常の中にあつて、それはふしぎではない見馴れた風景なのだつた。

思えば父が掘ることに生涯を賭けた石炭。馬が櫓に一トン二トンと積んで来て、わが家の前の石炭置場にざざっとあける。それが冬の慣わしで、わたしたちは石炭を惜しみなく燃やして冬を過ごした。ごおーごおーと音をたてて燃えるストーブの中のオレンジ色の火。この黒い燃える石についても馴れっこになると何のふしぎも湧かないが、思えば何という古いむかしのいのちを燃やしていたのだろう。

幼年の日を思う時、ストーブの火の色に見惚れている自分や、風の音に胸しめつけられて床の中で目を開いている姿や、ぎらぎらと恐しいままで輝く星空を仰いでいるうちに、何とも名状し難い恐しさと孤独におそわれて、それをひとに告げることばもわからず、はばかられて、それから幾日も星空の恐しさにおびえていた日や、そんな姿と一緒に犬の頭をつかんだ儘、盲めつ法犬に引かせてスキで山野を滑ったスリル溢れたあそびや、川のほとりで一心に小石を磨いたり、泥をこねたり、草や木でおうちをこしらえたり、フレップや木苺つみにあけられて、木のぼりしたり木をゆすったりしてあそんだ日々がよみがえる。

そうして、それらひとつひとつが四十年という年月を経ていよいよ鮮やかによみがえる時、幼年の意味がわたしにはすこしずつわかりかけて来たように思う。

正に幼年の日にこそすべての核があったのだと――。

そのむかし当り前だったすべてのことを新しくよみがえらせる時、わたしはそこでもう一度幼女となって再び体験するわけだが、その時、その当り前の日常が当り前でなくなり、つまり馴れのベールを剝いだところの新鮮なおどろきと共に、さまざまのふしぎに対面する。それ故、幼年は一層わたしに近くなり髪が白くなった今も、幼い日その背のつてあそんだ金色熊の毛皮――が、いのちある熊となり、まざまざとわたしの内で金色の毛波打たせて立ち上がり、うふうーと息を吐いたりするのである。

(児童文学者)